

文章に表れているものの見方を読み取る 〈故郷に寄せる思い〉	組番	氏名
----------------------------------	----	----

鈴木さんは、国語の時間に、平成二十四年は「古事記」編さんから千三百年にあたり、県立図書館には特設のコナーが作られていることを聞きました。そこで、さっそく、県立図書館で「古事記」を借りて読んでみると、「古事記」の中には、宮崎を舞台とした話や地名が数多くあることが分かり千三百年の年月を超えて「古事記」が身近に感じられました。また、倭建命が故郷を詠んだ短歌があり、昔の人も、今の時代に生きる私たちに通じる思いがあることに気づきました。

そこでさまざまな時代に書かれた「故郷」を題材にした文章を集めてみることにしました。

資料1

「古事記」(奈良時代)
 其より幸行して、能煩野に到りし時に、国を思ひて、歌ひて曰はく、
 倭は 国の真秀ろば たたなづく
 青垣 山籠もれる 倭し麗し

【現代語訳】
 (倭建命が)そこから(更に)進んでいらして能煩野に到着したときに、故郷を思って、歌って言うことには、
 大和は、国の中でも非常に優れたすばらしいところだ。重なり合った、青い垣根のような、山々の中に籠っている大和は美しい。

資料2

「万葉集」阿部仲麻呂(奈良時代) ※ 中国に渡ったときに詠んだ短歌。
 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

【現代語訳】
 大空をはるか遠くまで眺めると月が輝いている、あれは昔、故郷の三笠山に出た月なのだ。

資料3

「ふるさと」高野 辰之(大正時代)

うさぎ追いし かの山 小鮒釣りし かの川 夢は今も めぐりて 忘れがたき故郷
 いかにいます 父母 恙なしや 友がき 雨に風に つけても思いいづる故郷
 こころざしを 果たして いつの日にか 帰らん 山はあおき 故郷 水は清き故郷

資料4

石川 啄木(明治時代)
 ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそれを聴きに行く

資料5

若山 牧水(昭和時代)
 なつかしき城山の鐘鳴り出でぬ幼かりし日ききしごとくに

